
もっふもふ！

のわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もっふもふ！

【Nコード】

N6065T

【作者名】

のわ

【あらすじ】

気づいたら犬耳とふさふさの尻尾がついて、しかも美少女っぽくなっちゃったんですけど、どうすればいいですか。異世界へトリップした途端、獣人になってしまった主人公、松井理沙。そんな彼女の、同族っぽいイケメンたちを嵌め・・・じゃなくて虜にする逆ハー物語！

プロローグ

「リサ、だあいすき！」

うひゃあ

そんなこと抱きしめられながら敏感な耳元で囁かれたら、お腹の辺りがぞわってなっっちゃうわ!!!
思わず耳がびくびくしちゃったよ。

「やめろ。リサにそんなことするな」

そういつて抱きしめられていた腕の中から引っこ抜かれる。

「うい」

引っこ抜かれるとは言ったけど、その力はとても優しい。
そう。ここの住人はみんな私に優しいのだ。

この人たちと出会えてよかったな。

心からそう思える。

だってニセモノの私を拾って大切にしてくれているんだから。
彼らから見たら、同族に見えた私を哀れに思っただけなのかもしれない。

いつか本当のことに気づいたら蔑んだ目でみられて捨てられるかもしれない。

でも……。

そんな日がくるまでは、
せめてこの瞬間だけはまどろんでいたい。
ひそかに心の中で思った。

プロローグ（後書き）

あれ、なんかしょっぱなからシリアス……。
次からはラブラブのはずです、多分。

もっふもふしたものが書きたくなってつい書いてしまいました。
矛盾するかもしれませんが……。
なんとという計画のなさなんだ……。。

読んでくださった方、ありがとうございます！！

穏やかな日々

私、松井理沙は気づいたら異世界トリップして、しかも犬耳と尻尾がついてしまった女の子だ。

黒髪と犬耳、尻尾のせいで、この人間たちには色んな目に遭わされた。

人間によってボロボロにされていた私を、同じく犬耳と尻尾がついた彼らが拾ってくれたのだ。

いやー拾われてなかったら今頃もつと酷い目にあっていただろうなあ。

そう思うと感謝してもしきれない。

少し記憶がトリップしていたら、私を引っこ抜いた獣人・リヒャルトが頭を撫でてきた。

頭撫でられるのは気持ちいい。

なんというかパワーってなるよね。

パタパタパタ

思わず尻尾がパタパタしちゃったよ。

うーん・・・何ていうか感情ダダもれだよねこれ。

嬉しいとパタパタしちゃうし。まあ、悲しいときはもう感情を抑えられるけど。

目の前にいる二人を尊敬しちゃうよ。

だって同じ耳と尻尾もってるのに全然感情よめないもん。

うーん・・・未だに尻尾の扱いに慣れないや。

なんて思いながらも、未だに尻尾をパタパタしている私をみて、リヒャルトが笑った

「かわいいな、リサは」

いや、全然可愛くないでしょ。むしろ恥ずかしいよ。どうやったなら感情が漏れないか教えてほしいなあ。

「かあいくないよ！あたしも、リーとイーみたいに尻尾パタパタ抑えたい！」

そうさ！もっと、コントロールしたいんだ！！プライバシー守りたいんだよ！！！！

「ダメだ（よ）」

え。

「そんな可愛い可愛い可愛いリサがリヒャルトみたいな冷血むっつりになるなんて僕は認めない。」

え、どゆこと？てかりーがむっつりとは知らなかった。

「うるさい。俺だってリサがお前みたいな腹黒になったら嫌だ。」

うーん確かに、純粹そうな笑顔でそんなこと言っている彼・イエロンが腹黒なのは認めるけど。

でもねえ、それとこれとは違うでしょう。

私はただプライバシーを守りたいだけだし。

よし、こうなったら奥の手。

「あたしもつと尻尾パタパタ抑えたいの！リー、イーおしえて？」

この世界にきてから、なぜか舌足らずになってしまった私。
最初は喋りづらいし、なんかぶりっ子みたいで嫌だったけど、だんだん慣れてきた。

そして今回はその舌足らずを十分活用し、うるうるした瞳で上目づかいでお願いしてみる。

「「うっ」」

二人が若干固まったのが分かる。

よしその調子だ。さあ、堕ちるがよい。

「だめ??」

さあ!!!どうだ!!!

「……だ、ダメだ!!!可愛いけど、可愛いけどそれはダメだ
!!!」

……ちえ。なんだ、せつかく頑張つて可愛さ絞り出したのに。

「あーもう。リサは本当にかわいいなあ。もっと撫でまわして滅茶
苦茶にしたいよ」

ちよっと、なんか嫌なセリフが聞こえましたよイエロンさん。
あなたは恐ろしいです。

つて、うやあ……そういいながら耳触られたら、あまりの衝撃に
膝に力が入らなくなるから。

「いやあ……んっ……やめてえ」

むなしい抵抗も敵わず、逆にイーの指先がエロくなってきた。
ちよ、こっからはいかんて。
リー助けてくれえ!!!

「やめろ、そんなことするな」

思いが届いたらしい。リーはイーの手から私を引っこ抜いてくれた。
いやー助かりましたよ。

「ああがとーリー」

うん。ありがとうね、お礼にとびっきりの笑顔をプレゼントしよう。
あつ、リユーが固まったぞ。あんまり表情が出ない人だから、そう
いうのを見ると楽しい。

私は、さらにリーのびっくりした姿を見るために今度は抱き着いて
みた。

リユーの体がビクツとするのが感じられる。
ホントおもしろいなあ。

その時。ふと後ろからものすごい負のオーラを感じた。

・・・これはちょっとヤバいぞ。

「おいリヒャルト、お前なんでリサに抱き着かれてるのかなあ。早
く離れる。殺されたいのか。」

おおつと。いけない。こりゃイーがキレてしまった。

イーは怒ると怖いからなあ。私のせいでリーが傷つくのはいやだし。
まあ、リーがそんなに弱いはずもないんだけど。

ここは私が動くしかなさそうだ。

リーから離れて、私は未だに負のオーラを放っているイーのもとへといった。

うーん、ちょっとこわい。

でも勇気を振り絞るぜ！！

「イー、おこあないで？」

抱き着きながら、上目づかいで言ってみる。

みるみるうちにイーの不機嫌なオーラが消えていくのが分かった。

よし。最後の一押し！

「おこってるイーきらあい。優しいイーすき！ね？おこあないで？」

嫌いという言葉にやたら反応したイーさん。

めっちゃビクッてしてたね。まあ、次のすきって言葉にも反応してたけど。

「・・・リサに言われたなら仕方ないね。おいリヒャルト後で覚えとけよ」

・・・あれ、最後怖い言葉聞こえたけど。まあ、とりあえずいいか。

時々、物騒なこともあるけど、

穏やかに過ぎていくこの日々が、

柔らかなこの空気が、

私はとつても好きだ。

穏やかな日々（後書き）

リヒャルト リー

イエレン イー

となっております。

筆者時々、リヒャルトの愛称リユーて書いちゃつかもせれません。
その時は指摘してくださいと嬉しいです。

理沙さんちよいと小悪魔。

穏やかな日々2

森の中の奥深くにひっそりとログハウスが建っている。
そこが私たちの住処。

住人は私を入れて6人。

さつき喧嘩しそうだったりヒヤルトとイエルの他に、
あと三人、同じように犬耳と尻尾を持った人たちがいる。

よし。今回は、その人たちを紹介しよう！

まず一人目！

名前はハインツ。

呼びにくいから、ハイって呼んでいる。

名前にハイってついてるだけあって、めちゃくちゃテンションが高い。

そしてやたらスキンシップをとりたがる人だ。いや、みんなスキンシップは多いけどね。

若干のたれ目で、口にはいつも人懐っこい笑みを浮かべている近づきやすい人だ。

あ、あと天パ。

二人目！！

名前はレギナルト。

この人も舌足らず機能で呼びにくいので、レギトーと呼ばせてもらってる。

ずばり!!!

この人を一言で表すと、「無」だ。
リヒャルトも確かにあまり表情が出ないが、この人は彼をさらに無表情にした感じ。

何を言っても表情が変わらない。
でも、その代り目に感情が出る。

昔は気付かなかったけど、今は目を見て思っていることが理解できるようになった。

そう考えると、レギナルトが一番表情豊かかもしれない。

そして三人目は・・・

「ただーいまああああ」

あ、今紹介しようとした三人が帰ってきた!!!
ちよつと玄関にいつてきます。

「おかえり!!!ハイ、レギトー、ディー!!!!」

そう言つて、私は満面の笑みを浮かべる。

この人たちは、今まで王都に行つていて此処に帰ってきたのは2日ぶり。

たった2日だけど、いないと寂しい。

ガシッ

うおっつ。誰かに抱き着かれたぞ。

「ああーただいまリサ！君に会いたくて、会いたくて、会いたくて、会いたくて夜も眠れなかったよ！君がいない2日間は地獄だ。僕がいない間元気にしてた？リヒャルトとイエルンに意地悪されてない？？あれ？リサちよつと背伸びたんじゃない！？可愛いなあリサは！もう大好き大好き大好き大好き」

「おいハインツ。いくらリサに会えなかったからってたった2日じやねーか。ギヤーギヤーうるせーぞ」

そういつて、私に抱き着いているハインツをなだめたのは、ディルク。とつても男らしいおじさんだ。

そうだなあ、地球でいうヒール・ジャックマンだろうか。がっしりとした腕、大きい胸板、そしてそれに見合った長身。

筋肉隆々だが、スタイルは全然悪くない。そして何より整ったワイルドな顔立ち！

ぶつちやけると、5人の中で一番好みの顔だったりする。まあ、あくまでお父さんっていうポジションだけだ。

「うるさいよ。ディルク。僕にとっては生きるか死ぬかの問題なんだ。たった2日だ！？違うぞ！2日もだぞ！！分に直したら2880分も会えなかったんだ！！これがどれだけ重大なことかわかる！？」

いや、全然わからん。事が大きすぎるわ。てか、ハインツ計算はやいな。

「意味わからねーよ。確かにリサに会えなかったのは寂しいが、死活問題でもないだろ。二日なんて」

そうだね。ディルクの言うとおりだよ。やっぱりディルクは常識人だなあ。

「ディーじょーしきじんー!!」

ハインツの腕を離れてそう言ってみた。

「おう、ありがとよ。まあ、こん中じゃ当たり前だけどな。」

そういつて、ディルクはガシガシと頭をなでる。

髪の毛がぐじゃぐじゃになるけどこの撫で方は結構好き。

いや、むしろ撫でるより搔き回すの方があってるかも。

「うひゃあ。ぐじゃぐじゃなっちったあ」

なんて言っていたら、スツスツ、と髪の毛をすいてくれる人物が。

「レギトー！ああがとー!!」

レギトーだ。彼は無だから、一瞬分らない。

「ん」

それだけ言いながらレギトーはずっと私の髪を梳いてくれた。

この髪色がおぞましくはないのだろうか。

不安になって、レギトーの目を見る。

よかった、穏やかだ。

こうやって、いちいち顔色を窺わなきゃ不安な自分が嫌。

もつと自分に自信を持ちたい。

いつか嫌われるのではと思う自分が嫌。

こんなネガティブな思考捨ててしまいたい。

「おい三人。いくら久しぶりに会えたからって、スキンシップおおすぎ。僕も混ぜて」

あ、ネガティブな思考にダイブしてたら、

壁にもたれかかって様子を見ていたイーがやってきたぞ。

「ハインツさつきからうるさいよ。確かに2日間も会えないのは死活問題かもしれないけれど、そんな騒いでたら、リサの耳がかわいそうだ」

「っは！！そうなの！？ゴメンねリサ！全然気付いてやれなかった」

いや、全然大丈夫なんですけど。

なんていうかみんな過保護すぎ。

こんなんじゃない私、生意気な女になっちゃうわ。

しょうがない。みんなを落ち着かせるために一言いうか。

「みんな！わたしは、のーぷおぶれむ、だよ！」

親指を反るくらい突き立て、歯を輝かせて言ってみた。

「」「」「」

・・・あれ？さすがにこれは気持ち悪かったか？

「なんて可愛いんだ！！もう、大好き大好き大好き……」

「ダメだリサ。滅茶苦茶にしたい。」

「お前は本当にかわいいなあ。将来が不安だ」

「本当に。まあ、俺たちが守るが」

「……かわいい」

おっおっおっ

みんな色々なこと言ってるって聞こえん。

まあいいや、とりあえず楽しいから。

毎日を楽しんでますぜ！ひゃっほーい！

穏やかな日々2 (後書き)

あれ、リサのテンションがおかしい・・・。

リサ、基本ネガティブです。

まあ、ネガティブすぎて逆にポジティブな時もありますが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6065t/>

もっふもふ！

2011年5月30日08時05分発行